慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	学位授与者氏名及び論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1990
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.30 (1990.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000030-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学事報告

学位授与者氏名及び論文題目

修　士（平成元年３月）

社会学修士（社会学専攻のもの）

第614号　鈴木　淑元　青年期における対人関係の変容

第615号　河野　恭子　心理臨床家への道

第616号　土屋　満明　「幹線道路沿線住民の心理学的ストレス」―環境ストレス論の見地から―

第617号　富岡　義勝　オーストラリアにおける移民の受容過程に関する一考察

第618号　丹羽　郁夫　自閉症児を抱える母親の適応プロセス　―ストレス・コーピング・ソーシャルサポートモデルから―

第619号　熊倉　敬子　投影法における音刺激の有効性について

第620号　由井　香織　日本におけるＱＣの受容と変容過程

第621号　石川　孝雄　ミシェル・フーコーの空間論

第622号　内田　美子　住環境変化が高齢者に及ぼす影響　―高齢者居住施設のリロケーション・ケースをめぐって―

第623号　岡田あおい　《アナール》学派の家族史研究　―日常生活論の視点から―

第624号　尾川　丈一　エンカウンター・グループにおけるステージ形成について―ベイトソン理論による精緻化の試み―

第625号　小森　秀樹　近代日本における被差別部落調査

第626号　朱　美珍　戦後日本の経営活動とその実態　―社会学的視点から―

第627号　鈴木　裕之　現代アフリカ都市におけるエスニック・ダイナミズム　―ザイール・キンシャサの事例を中心として―

第628号　髙橋　晋一　台湾の王爺信仰　―その象徴論的考察―

第629号　崔　鶴山　日本の新聞における韓国報道―朝日新聞の内容分析―

第630号　内田　恭彦　「職務不確実性」への組織心理学的接近　―職務不確実性がモティベーションおよび職務満足に及ぼす効果の実証的分析―

第631号　三木　都　事例を通してみた理解されることの意味　―共なる体験の現象学―

第632号　吉田　悟　精神障害者共同作業所が精神障害者の一般就労に効果的な機能を果たすために，改善しなければならない諸問題

文学修士（心理学専攻のもの）

第633号　北島　洋樹　主観的正面に及ぼす頭部及び眼球の位置の影響

第634号　島宗　理　日常行動の制御に及ぼすグループ随伴性の効果：幼児，児童，および成人を対象に

第635号　水野　瑞恵　ラットにおける論理的対称性の形成

文学修士（教育学専攻のもの）

第636号　犬塚　典子　教育バウチャーに関する一考察

第637号　五十嵐典子　小学生のソシオメトリーによる社会的地位と自己報告データとの関連について

第638号　川並　芳純　初任者研修制度についての一考察

第639号　小林　亮　感情移入能力の発達に関する比較文化的視点からの考察―実験倫理学への一試論―

第640号　呉　淑華　子供の創造性教育のための基礎的研究　―知能・学力・ＳＥＳなどとの関連における創造性の位置づけ―

第641号　陳　　文媛　道徳教育の再検討　一日本と台湾の実践を手がかりにして一

第642号　藤原　淳賀　P．ティリッヒの信仰理解とその教育学的意義

第643号　柳田　雅明　私立大学経営に関する一考察一ある実業家である学校経営者の工業単科大学における戦略，実行とその成果についての考察

第644号　山元　有一　教育の現象学的記述の可能性について

博　士（昭和63年度）

教育学博士

甲　第902号　林　　文　瑛

A CROSS-CULTURAL EXAMINATION OF THE PHENOMENON OF LYING AND ITS RELATIONSHIP TO MORAL JUDGMENT（「嘘」現象及び嘘と道徳判断との関係に関する比較文化的研究）

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学文学部教授，社会学研究科委員
教育学博士　並　木　　博

副査　慶應義塾大学新聞研究所教授，
社会学研究科委員，哲学博士
岩　男　寿美子

副査　常磐大学人間科学部教授，
慶應義塾大学名誉教授
斉　藤　幸一郎

副査　お茶の水女子大学文教育学部助教授
内　藤　俊　史

〔内　容　の　要　旨〕

この論文は新しい心理学的視点から，嘘の現象及び嘘に関する道徳判断を比較文化的，及び発達的に検討したものである。

個人面接及び質問紙法により，道徳性の発達と嘘をつくことにおける良心，及び状況要因の役割についての調査を日本と台湾において行なった。それぞれの国で6才から21才までの児童，青年を被験者として，日本1029名，台湾945名の横断的データが得られた。調査の方法は，異なる判断情報を被験者に与え，判断を求めるPiaget と Kohlberg の例話方式を著者の研究目的に合わせて修正したものである。

調査Ⅰは，子供が嘘について判断あるいは評価する際，嘘をつく「意図」と「結果」の情報とがどのように関係しているかを明らかにしようとしたものであり，さらに得られた結果を Piaget の調査結果と比較，検討したものである。調査Ⅰの被験者は，日本と台湾の6才の幼稚園児と8才，10才，12才の小学生であった。結果によると幼児が「正直であれ」，つまり「嘘をつくな」という概念の理解に根本的な困難が見られた。つまり，「嘘をつくな」ということは，大人から律される変動不可の規範として認知されている。一方，8才と8才以上の子供は，嘘について意図と結果の両要素をともに判断の際考慮していた。より発達した道徳判断において，状況的要因がより大切な役割を果していることを示したものと言える。

嘘の認知についての結果は，おおよそ Piaget の調査結果を支持した。幼児が嘘を一義的に，また教条主義的にとらえるが，より大きい子供は，それに比べるともっと経験的にとらえ，その理由づけに社会的適応の規則により多くのウエイトを置いた。

この調査によって，意図，結果の両要素に基づいた先行研究の方法論的問題点いくつかが指摘された。特に例話が用いられる場合，意図，結果のほかに行為（手段）という変数に細心な注意を払う必要が示唆された。

調査Ⅱは13才の中学生から20才以上の大学生，成人までを対象に，異なる嘘の葛藤場面において判断を下す際，特定の道徳知識と実際面での道徳上の選択の問題との関係を見ようとしたものである。考察によると，年齢の増加につれて道徳的原則が社会規範的になる傾向が認められた。「正直であれ」，つまり「嘘をつくな」という原則が義務論的道徳というより，個人の置かれた状況に適用するかどうかの判断を必要とする考え方になっていく傾向がみられた。

調査の結果から，人が仮説的道徳判断をする際と実際に行為に移す実際的判断する際，異なる選択をし，異なる理由づけを使うことが明らかになった。そして，身体的成熟と社会的経験の増加につれて，相対的な道徳認知が多く見られた。こうしたことから道徳判断の概念は多